

すごい point

- ・可児の人物が、戦国時代にとても活躍していたんだよ。



(可児市所蔵)

◎ 森乱丸 (蘭丸)

兼山にある美濃金山城で育ちました。小さいころから織田信長の小姓（そばにいて用件を聞く役目）として活躍しました。とても頭がよく上に美少年であったといわれ、信長に大変かわいがられたようです。

織田信長が明智光秀の軍勢の襲撃を受けた「本能寺の変」のときも、最後まで信長と運命を共にし、18歳という若さでこの世を去りました。

◎ 森長可

森乱丸のお兄さんです。乱丸と同じく織田信長に仕えました。いくさの名人で、数々の戦いで手柄をあげています。あまりに強いので「鬼武蔵」と呼ばれていました。

しかし、いくさだけでなく美濃金山城主として城下町の整備に力を入れるなど、政治の面でもすぐれた能力を発揮しました。兼山の可成寺に、森氏一族のお墓があります。



(可成寺所蔵)



土田城跡

◎ 土田御前

織田信長のお母さんです。生まれたところについては色々な意見がありますが、可児市の土田で生まれ育ったという説もあります。

織田信秀にとつぎ、織田信長やお市の方を産みました。土田御前の生涯については、くわしいことはわかっていません。

◎ 明智光秀

出身地は、可児市瀬田といわれています。本能寺の変をおこし、織田信長を自害に追いこんだことで有名です。

いくさが上手な武将でしたが政治面にも優れ、その上、茶の湯や連歌もたしなむ文化人でした。

本能寺の変の後、「山崎の戦い」で羽柴（豊臣）秀吉に敗れました。

一説には、信長の妻・濃姫の母親（小見の方）も明智光秀の一族だといわれています。



(岸和田市 本徳寺所蔵)

すごい point

- ・土田のガラスづくりは全国でも最先端^{さいせんたん}だったんだ。
- ・わくわく体験館でもガラスづくり体験ができるよ。

現在、ガラスでつくられたものは、みなさんの身の回りにたくさんあります。値段も安く、すぐに手に入れることができます。しかし、江戸時代にはガラスは貴重品^{きちうひん}で、たくさんつくることができないものでした。また、ガラスのことを外国の言葉を使って「びいどろ」と呼んでいました。

ガラスがめずらしいものであった江戸時代に、可児の土田でガラスづくりをはじめた人がいました。その人物が「石塚硝子株式会社」の創業者・石塚岩三郎です。

下総国^{しもうさのくに}（千葉県）で武士の次男として生まれた岩三郎は、冒険心^{ぼうけんしん}にあふれた人物でした。

広い世界を見てみたいとの思いから旅に出て、長崎^{ながさき}でガラスに出会いました。初めて見るその美しさに引きこまれた岩三郎は、ガラスづくりを生涯^{しょうがいの}の仕事にしようと、苦勞^{くろう}の末、秘伝^{ひでん}といわれたガラスのつくり方を習得^{しゅうとく}しました。



岩三郎の作品（再現したもの）



ガラスづくりの想像図

◎土田でガラスの原料（^{けいせき}珪石）を発見

岩三郎は、中山道^{なかせんどう}を通して故郷^{こきょう}へ帰る途中^{とちゅう}、可児の土田村でガラスの原料の珪石^{けいせき}を発見し、故郷に帰ることなく生涯、土田村でガラスをつくりつづけました。

土田でのガラスづくりは全国的にみても、早い時期にはじまっています。

岩三郎は1867年に亡くなりますが、ガラスづくりは子や弟子たちに引きつがれていきました。

土田村で70年続いたガラスづくりは、明治21年（1888）、交通の便などから名古屋に移り、現在は愛知県岩倉市^{いわくら}に本社を置く「石塚硝子株式会社」^{がらす}として、国内トップクラスのガラス製造会社になっています。

◎わくわく体験館のガラス工芸体験

平成11年（1999）に、可児市塩河^{しゅうが}にわくわく体験館がオープンしました。わくわく体験館は、宿泊とガラス工芸体験ができる研修施設^{けんしゅうしせつ}です。人が息を吹きこんでガラスをふくらませる「吹きガラス」のつくり方を見学したり、自分で体験したりすることができます。

また、わくわく体験館では、石塚岩三郎がつくったびいどろを、当時のつくり方・原料を使って再現する取り組みもおこなっています。

土田でびいどろをつくり始めた石塚岩三郎の心は、現代の可児にも受けつがれています。



「吹きガラス」の様子



サクライソウ



加藤新市(名古屋市 加藤ハツ家資料)

すごい point

- ・とてもめずらしいサクライソウという植物を、可児で発見した人だよ。
- ・小学校の先生をしながら植物の研究もしていたんだ。

◎学校の先生をしながら植物研究

加藤新市は、明治18年(1885)に久々利^{くくり}で生まれました。学校を卒業したあとは教師^{きょうし}になって、羽崎尋常小学校^{はざきじんじょう}や平牧尋常小学校^{ひらまきじんじょう}につとめました。

新市は、先生の仕事をしながら植物の研究を行っていました。たくさんの植物学者と交流があったほか、民俗学者^{みんぞく}や地質学者^{ちしつ}とも交流をもっていました。その活動は地域の学校の先生というより、全国レベルの博物学者^{はくぶつ}と呼べるものでした。

新市は、可児の山々を歩いて、さまざまな植物のスケッチ画を残しています。

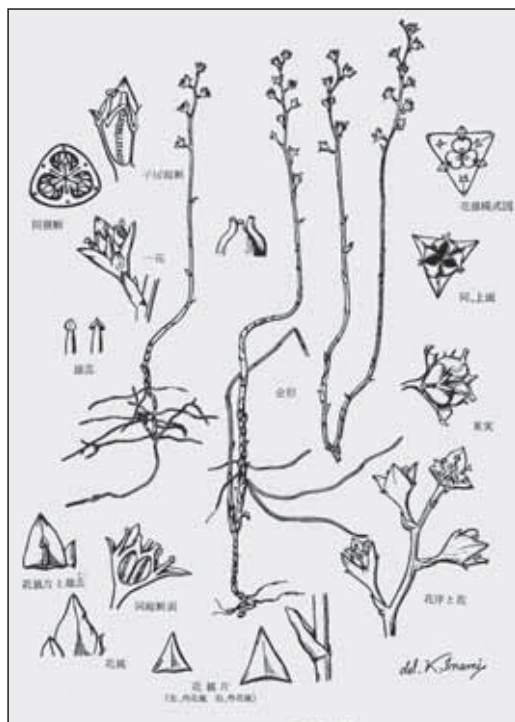
◎サクライソウの自生地を発見

大正3年(1914)、新市は久々利^{くくり}の浅間山^{せんげんやま}でサクライソウを発見します。サクライソウは、日本でも限られた場所でしか生えていない、とてもめずらしい植物で、当時はくわしい研究がされていませんでした。

サクライソウの自生地^{じせいち}を発見した新市は、くわしい研究を行い、その成果を学会に発表しました。

加藤新市が研究したサクライソウの自生地は、大正9年(1920)に国の天然記念物に指定されました。その後、生えている数が減少するなど、絶滅^{ぜつめつ}の危機もありましたが、現在も浅間山の自生地ではサクライソウの姿を見ることができます。

現在、日本のほかの場所ではこの貴重な絶滅危惧種^{きちよう ぜつめつ きぐしゅ}をみるのが難しくなっており、可児市のサクライソウ自生地は、ただ1つの国の天然記念物としても価値のあるものです。



サクライソウのスケッチ画

すごい point

- ・ 可児出身の一流雑誌編集者だよ。
- ・ 海老さんが考案したベビーブックは、現在の母子健康手帳のもとになったんだ。

大正末期から昭和初期は、女性がさまざまな職業につき、社会で活躍しはじめた時代でした。

当時、職業婦人と呼ばれた女性の中で、雑誌編集者として活躍した人物が、久々利出身の海老衣子です。

◎雑誌編集者として活躍

明治34年（1901）に生まれた衣子は、日本女子大学校（現在の日本女子大学）を卒業後、東京の出版社に就職しました。

衣子は、当時の人気雑誌である『婦人世界』や『少女の友』の編集者として、文学記事から手芸など実用的な記事をはば広く手がけました。そして、彼女が手がけた仕事の集大成といえる本が『ベビーブック』です。

◎ベビーブックの編集

昭和8年（1933）に出版された『ベビーブック』は、生まれてから小学生になるまでの子どもの成長を記録でき、さらに子育てのさまざまな知恵を盛りこんだ、子育てガイドブックともいえる本です。

当時、大ヒットしたこの本は、親が自分で書きこむという点でも、現在の母子健康手帳のもとになるものでした。

衣子は、『ベビーブック』出版から3年後、病に倒れ、35歳の若さでその生涯を終えますが、衣子の想いは母子健康手帳という形で日本中に受けつがれています。

おうちに母子健康手帳があれば一度見てみましょう。みなさんの生まれた時からの記録が残っているはずですよ。

現在、衣子の故郷である可児市は、「マイナス10カ月から つなぐ まなぶ かかわる 子育て」を推進しており、子育てしやすいまちづくりを目指しています。



海老衣子
(個人所蔵)



海老衣子が編集した『ベビーブック』

すごい point

- ・人間国宝には、重要な^{でんとうてきぎ}伝統的技法を持つ人がなれるんだよ。
- ・可児市には、人間国宝に^{にんてい}認定された人の工房が2つあるんだ。

◎人間国宝とは？

文化財は、仏像や古墳といったかたちのあるものばかりではありません。音楽や工芸などの分野における優れた「人のわざ」そのものが、文化財に指定されることもあります。

国が重要な文化財に指定した「わざ」を持っている人のことを、一般に「人間国宝」と呼びます。

◎^{あらかわとよぞう}荒川豊蔵（1894～1985）

多治見生まれの荒川豊蔵は、昭和5年（1930）に、^{おおがや}久々利の大萱の山の中で「たけのこ」の絵が描かれた志野の破片を見つけました（歴史じまん⑪）。

その後、豊蔵は昔と同じ技法（わざ）で陶器をつくろうと決心し、大萱に移り住みました。豊蔵はなんども失敗をくり返しながらも、美濃桃山陶の制作技法を再現することができました。

昭和30年（1955）には、志野と瀬戸黒の技法で人間国宝に認定されました。豊蔵が再現した美濃桃山陶のわざは、多くの陶工に受けつがれています。

◎^{かとうこうぞう}加藤孝造（1935～2023）

^{みづなみ}瑞浪生まれの加藤孝造も、美濃桃山陶の美しさに魅せられた一人です。昭和47年（1972）、孝造は久々利の平柴に窯をつくり、可児市を中心に^{さくとう}作陶活動をおこないました。また、荒川豊蔵に^し指導を受け、伝統的な技法を使って志野・瀬戸黒などの陶器の制作したことで有名です。

加藤孝造は、平成22年（2010）に瀬戸黒の技法で人間国宝に認定されました。瀬戸黒のわざでの認定は、荒川豊蔵に続いて史上2人目になります。



荒川豊蔵
（個人所蔵・撮影 加納陽治）



加藤孝造



荒川豊蔵作 志野茶わん



加藤孝造作 瀬戸黒茶わん